Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-06

社会の時間と社会学の時間

高橋，顕也

(Citation)
社会の時間 : 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:5-7

(Issue Date)
2022-06-30

(Resource Type)
research report

(Version)
Accepted Manuscript

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009402

はじめに　社会の時間と社会学の時間

「何であるか。誰も私に問い尋ねるのでなければ、私は知っている。しかし、誰か問い尋ねる者に説明しようとすると、私は知らないのである」。さまざまな時間論で引用されてきたアウグスティヌスのあまりに有名なこの一節の主題はもちろん「時間」である。時間が自明でありかつ不可思議であるのは、あるいはむしろ、身近すぎるがゆえに謎めいたままであるのは、一哲学者にとってだけではない。社会学者にとってもまた然りである。しかも彼と違って、二重の意味で。社会学の対象は社会学者自身が生きている当の社会の諸現象であり、社会学者はまず個人としてそれらの現象を経験している。この経験がなければ社会学は成立し得ないだろうが、しかし同時に、社会学は自身の可能性の条件であるこの経験を対象化し、観察し、概念を用いて把握し、理論的に記述ないし説明し、それらの営みを何らかの存在論や認識論に基づいて正当化しなければならない。ここに社会と社会学との間の一筋縄ではいかない入り組んだ関係がある。

本論集が主題とする時間もまた、社会と社会学との相互作用のうちに捕われている。追い、追われ、進み、退き、引き伸ばし、節約し、失い、もてあますとき、振り返り、記念し、待ち、案じ、予想するとき、ともに過ごし、流れに身を任せ、決断し、区切りをつけ、繰り返すとき、私たちは私たちの時間をいつもすでに生きている。その意味で社会的な存在としての私たちは「社会の時間」を最も深い水準で知悉している。同様に、年齢や世代や経験年数を調査し、ライフヒストリーを尋ね、系譜を遡り、時代精神を明らかにし、将来を予測し構想しようとするとき、社会学者はいつもすでに何らかの「社会学の時間」を前提とし採用している。ところが「社会の時間」であれ「社会学の時間」であれ、その「なに」、「いかに」、そして「なぜ」を尋ねられるならば、たちまち言葉に窮してしまうだろう。かの古代の哲学者のように。そして、それらの問いは「時間の社会学」の元へ届けられる。

「時間の社会学」は、何らかの存在論や認識論を背景に、時間概念と時間論を、すなわち「社会学の時間」を彫琢し答えようと試みる。しかしながら、それらの答えの正当性は概念の論理的整合性や理論の体系性のみに基づくのではなく、究極的には私たちの社会的日常に内在している時間体験に求められなければならない。その意味で、「社会学の時間」の臍帯は「社会の時間」から伸びている。こうして時間の謎は、「社会の時間」と「社会学の時間」がつくりだす円環の中を循環し続けるのである。本論集の各章において、そして各章間の関係においても、「社会の時間」と「社会学の時間」の間にある相互的かつ緊張を孕んだ連関が随所に見出されるだろう。

「社会の時間」と「社会学の時間」の双方をともに視野に収めなければならない「時間の

社会学」は、それゆえ、多様な研究領域を包含する広さと、個々の研究領域における水準の深さを同時に達成しなければならないという困難を必然的に抱えている。「社会学の時間」については、今日まで継承され社会学の共通の財産となっている個々の社会学的な時間概念を学説史的に検討してその新たな展開可能性を示すとともに、学説横断的に比較、関係づけ、そして一般化を行う理論的なアプローチも欠かせない。また、それに劣らず、「社会学の時間」を「社会の時間」に接続させる経験的な応用研究の重要性も看過することはできない。応用研究が十全なものとなるには、「時間の社会学」がその端緒から問題としてきた近代の時間のもつ意味を解明するマクロな水準の問題設定と、現代社会における個別具体的な時間経験のあり方を分析するミクロな水準の問題設定の両者が揃っていることが求められる。

本論集が、「時間の社会学」の研究書として論集形式を採用している理由もここにある。上記すべての研究領域を網羅することは、どんなに時間があっても一人の研究者には不可能であろう。なぜなら、「社会の時間」を研究する間に当の社会がさらに変化していってしまうからだ。「社会の時間」はつねに「社会学の時間」に先行するのである。むしろ、時間という主題から各領域の専門家の知見を集めることこそが、「時間の社会学」の唯一可能で、今後の標準となるべきあり方である。読み進めていくと明らかになっていくように、本論集においては各章どうしが明示的にも示唆的にも参照し合うことによって、全体として「時間の社会学」の多様性と総合性を表現している。

ここで簡潔に、「社会の時間」と「社会学の時間」という観点から整理した本論集の全体像を確認しておきたい。

本論集の前半（第 1 部および第 2 部）は、「社会学の時間」に正面から取り組む。まず第 1 章である。この章は時間の社会学の来し方を振り返り、それを社会的時間という構想の適応範囲を拡張してきた運動であると指摘している。この指摘はまさに本論集全体にも該当するのであり、この再帰的な章は時間の社会学の行く末をも占う本論集の巻頭に相応しい章となっている。そこに、古典を時間という視点から整理した学説史研究の各章が続く。とりあげられる大家は、デュルケーム（第 2 章）、ジンメル（第 5 章）、そしてミード（第 6 章）である。彼らはいずれも社会学そのもののみならず「社会学の時間」を論じる上で不可避の創始者たちであるとともに、今日的な「社会学」の枠組みに囚われない学際的な理論家であり、彼らが「社会の時間」をどのように捉えようと試みていたのかを解明することは、同時に、現在の「時間の社会学」を乗り越えていくための革新の源泉となるのである。そしてもう 1 名、九鬼周造である（第 7 章）。社会学者ではない彼がとりあげられるのは、社会学が暗黙の前提としている西洋的な時間の見方を相対化する試みをその時間論が行っているからであり、その意味で他の学説史研究や、第 4 章および第 10 章でとりあげられる見田宗介の時間論、また 8 章の主題である近代西洋の時間観についての諸研究と呼応している。

本論集には 2 つの革新的な理論研究も含まれる。1 つは社会学的システム理論の立場から、時間をメディアとして捉えようとするアプローチであり（第 3 章）、もう 1 つは公理論化という数理的方法論から「社会学の時間」を公理系として形式化しようとするアプローチである（第 4 章）。両者はともに、複雑化の一途をたどる現代社会に対応して多様化する「社会の時間」と「社会学の時間」を統合的に捉えようとする挑戦的な試行であり、「時間の社会学」の画期となりうる研究である。古典の再解釈という側面ももつ両章は学説史研究と併せて、「社会の時間」をめぐる経験的諸研究、すなわち近代性や個々の経験的領域の研究とも互いに影響を与え合うものである。

前半における社会学的時間論の解明と拡張を背景としつつ、本論集の後半（第 3 部および第 4 部）は、「社会学の時間」を「社会の時間」との関わりから、あるいは、「社会の時間」を「社会学の時間」との関わりから究明していく。大きく 2 つの水準の研究へ整理することができるだろう。第 1 に、近代における時間意識というマクロ水準の事象が考察対象となる。進歩と退歩の観念（第 8 章）、改元（第 9 章）、ニヒリズム（第 10 章）をめぐる論考は、近代を時間的な現象として捉え直しつつ、そこで生きざるを得ない人々の時間意識の問題から「社会の時間」へアプローチする。第 2 に、現代社会における多種多様な秩序、すなわち、組織（第 11 章）、金融（第 12 章）、ソーシャルメディアにおける相互作用（第 13 章）が事例としてとりあげられ、そこではミクロな水準まで分解できる具体的な相互作用ないしコミュケーションにおいて時間という契機が取り出されている。近代の時間意識も、コミュケーションにおける時間契機のあり方も、「社会学の時間」によって「社会の時間」の独自の論理が剔出される事例であり、かつ、前者が後者と最も密接に衝突し反作用を受け再考を促される領域であろう。本論集の後半は、時間をめぐる学説や理論が、具体的な応用事例においてどう活かしうるのか、あるいは活かせないのかという問いを意識しつつ読むことができる。

以上の各章はいずれも新進の若手研究者によって執筆され、従来の学説史研究やモダニティ論に時間という視点から新たに光を当て、理論研究の新たな方法論を提示し、あるいは現代に特徴的な時間現象に果敢に取り組むなど、どの 1 章をとっても十分に読みごたえのある「時間の社会学」となっている。そのうえで、それらが 1 冊に編まれることで、「社会学の時間」と「社会の時間」の間で取り結ばれる複雑多岐な形象の輪郭が浮き上がってくるだろう。そのような特質を有する本論集は「時間の社会学」において画期となるのみならず、時間という概念ないし変数、それは社会学一般の暗黙の前提となっているだが、の理解を深化させることで、社会学全体への貢献も果たすことだろう。そして本論集が体現しているように、「社会学の時間」の展開は「社会の時間」の解明を促すに違いないが、そこから新たに生じる挑戦を引き受けるのもまた「時間の社会学」の責務なのである。